

男女の性別の構造論的基礎について

小笠原晋也(東京ラカン塾)

<http://www.lacantokyo.org>

周知のように、2014年6月18日に東京都議会で都知事に対して男女不平等問題に関する質問を行っていた或る女性議員に対して、sexual harassment を構成する不規則発言を複数の男性議員が行った。その際、都知事(男性)も、それら不規則発言に反応して笑った。

この事件に関して、社会学的には、男の側の女性蔑視意識、男女同権意識の欠如を指摘し、社会的啓発を進めていくことを確認すれば十分であろう。

では精神分析家は？

ここでは敢えて Lacan の一見奇妙な性別の公式を持ち出すことは控え、むしろ、その公式の基礎をなす構造そのものに注目しよう。

人間存在の構造を成すのは、主体の存在の真理の現象学的構造である。それは、次の学素により形式化される：

$$\frac{a}{\phi}$$

一見分数のように見えるこの公式は、分数ではなく、ひとつの代理ないし代表の構造を形式化している。

そこにおいて、 ϕ は、人間主体の存在の真理を表す。そして、 a は、それ自体としては己れを隠している主体の存在の真理が己れを現すよう、それを代表ないし代理する存在事象である。

主体の存在の真理は、男でも女でも同じひとつのものである。それは、そのものとしては抹消されてしか書かれ得ない存在、すなわち、存在である。それは、存在事象そのもの全体に対しては、存在事象ではないものとして、無であり、すなわち、存在事象の場を開いたひとつの穴ないし深淵により差し徴される場所である。

そのような深淵として、つまりカオスとして、存在は不安を惹起する。それが、Freud が去勢不安と呼んだものの真理である。

人間は、その不安惹起性のゆえに、存在の場所を開いた深淵を見ずにすまそうとする。そのためには、その穴を塞ぎ、その痕跡を遠ざけるしかない。遠ざけるしかたもいろいろある。忌まわしい

ものとする事、卑しめる事、逆に、神聖なものとする事、理想化する事、等々。

存在そのものは男女において同じであるとすれば、男女の差異を構成するのは、したがって、 a である。

主体の存在の真理の現象学的構造を性別について見るとき、男の存在構造における a は phallus Φ と定義される。それは、Freud が Primat des Phallus [ファロスの優位] という際のファロスである。

Freud は、libido の発達論において、部分客体にかかわる部分本能は最終的には生殖を目的とする性器的本能へ成長せねばならない、と想定した。そして、心的次元において性別を決定するのは、性器の解剖学的差異ではなく、単純に、ファロスの有無であると規定した。

そのようなファロスを Lacan が Φ で記したのにならって、男の存在構造はこう形式化される：

$$\frac{\Phi}{\Phi}$$

それに対して、女の存在構造においては、 a は、単純に、穴、または、切れめそのものである。それをとりあえず 0 (ゼロ) で表記するなら、女の存在構造はこう形式化される：

$$\frac{0}{\Phi}$$

男の構造においては、不安を惹起する存在の深淵は Freud 的なファロス、すなわち、ひとつの仮象としてのファロスにより覆い隠される。そのようなファロスは、存在の真理に対しては、あくまでひとつの仮象にすぎない。見せかけ、はったり、まがいもの、ごまかし、等々、それを言う用語はいろいろあるだろう。

それに対して、女の構造においては、存在の深淵の穴は開いたままである。それは、男にとっては、去勢不安を惹起する恐ろしい穴である。それを裸のまま放置しておくわけにはいかない。何かで覆い隠さねばならない。その方法は、衣類、装身具、物理的隔離、等々、さまざまである。

さらに、衣類等で覆い隠しただけでは安心できない。社会的に進出して、男の面前に身をさらしてくる女がいれば、それは既に危険信号である。それを卑しめ、貶めねばならない。それによって、男は、この不安の対象は、大したものではないのだ、怖がることはないのだ、と自分に言い聞かせ、

何とか平静を保とうとする。

以上のような事態が、今回の sexual harassment の事件を動機づけている。厄介なことに、この問題は社会的には解消しようがない。

それを解決するには、より多くの者が、みづからの精神分析の経験を通じて、己れの存在の真理の深淵を直視するしかない。その深淵の構造は、男においても女においても、同じである。

2014年6月25日